様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１０１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０４４３０

研究課題名（和文）全室暖房完成時代のエンプティネスト期を迎えた住宅からみる寒地住宅の新たな可能性

研究課題名（英文）Possibilities for Empty Nest House of the Era of Whole-House Heating Completion

研究代表者
真境名　達哉（MAJIKINA, Tatsuya）

室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：８０３３３６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：住宅購入後に住み替えの少ない日本では、子供の巣立ち後の部屋の活用は、老後などの住宅の質に大きく関わると考える。研究では巣立ち後の元子供室利用の様子、また子供の今後のライフサイクルに関し、夫婦などがどのような意識を持つか、その一端を捉えた。調査の結果、巣立ち直後は、巣立った子供のライフサイクル（結婚や就職など）と大きく関わるが、その後には夫婦の別室就寝などの要求に合わせて使われる傾向が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
住宅購入後に住み替えの少ない日本では、子供の巣立ち後の部屋の活用は、老後などの住宅の質に大きく関わると考える。研究では巣立ち後の元子供室利用の様子、また子供の今後のライフサイクルに関し、夫婦などがどのような意識を持つか、その一端を捉えた。調査の結果、巣立ち直後は、巣立った子供のライフサイクル（結婚や就職など）と大きく関わるが、その後には夫婦の別室就寝などの要求に合わせて使われる傾向が見られた。

研究成果の概要（英文）：In Japan, where people rarely change their place of residence after purchasing a house, the use of children's rooms after they leave the nest is considered to have a significant impact on the quality of housing, such as in old age. This study tries to understand how former children's rooms are used after children leave the house, and what kind of attitudes parents and others have regarding the future life cycle of their children. The results of the survey showed that immediately after the child leaves the nest, the room is largely related to the child's life cycle (marriage, employment, etc.), but after that, the room tends to be used according to the needs of the parents, such as sleeping in separate rooms.

研究分野：都市計画・建築計画

キーワード：子供室　子供の巣立ち　住宅　部屋利用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

住宅金融公庫調査によると、北海道における 1999 年新築戸建てでは、住宅の全室暖房化で既に 88%となっており、これらの住宅も子供らの巣立ち期を迎えている。見方によっては、これらは寒冷地がかつて経験したことのない、余裕室が多く有する住宅の出現といえる。本研究の目的は、これら巣立ち期を迎えた住宅の巣立ち室（子供部屋）に着目し、Ⅰ.巣立ち室利用の基本的傾向把握、Ⅱ.地域比較からみた寒冷地における巣立ち室利用促進要因の把握、Ⅲ.「巣立ち室＝新余裕室」でみる寒地住宅の再編のあり方を考える。具体的には寒冷地北海道、亜寒冷地青森、温暖地千葉の 3 箇所の比較調査で明らかにする。

２．研究の目的

本研究の目的は、これら巣立ち期を迎えた住宅の巣立ち室（子供部屋）に着目し、それらを踏まえた寒地住宅の新たな可能性を示すことにある。具体的には、Ⅰ．巣立ち室利用の基本的傾向把握を行なう。研究に際しては、まず子供巣立ち後 0–10 年経ったエンプティネスト世帯（以降、EN）を「EN 初期（およそ世帯主年齢 50 歳代）」、EN 発生後 10-20 年世帯を「EN 中期（およそ世帯主年齢 50 歳代）」、20 年以降を「EN 中期（およそ世帯主年齢 50 歳代）」定義した。まずは基本的傾向としては、子供巣立ちと共に、元子供室の使われ方と、特に夫婦の領域の変化について把握を行なう。また、元子供部屋への夫婦の意向は、子供のライフイベントとも関連すると思われたので、ライフイベントとの関連を捉える。
また、Ⅱ.元子供室の利用に関しては、地域比較があると思われる。特に子供の帰省が頻繁であるなどの特徴のある「都会」と「地方」では、元子供室の利用意向などは異なることが考えられるため、これらの違いを捉える。Ⅲ.「巣立ち室＝新余裕室」でみる寒地住宅の再編についての方策を捉えるため、寒冷地北海道、亜寒冷地青森、温暖地千葉の 3 箇所の比較調査により明らかにしたいと考えたが、コロナ禍の影響で調査には様々な制約が生じたため、主にⅠに関する調査を行なうことにしている。

３．研究の方法

研究 1 年目（2021 年）は、苫小牧市に住む EN 初期の世帯を対象にアンケート調査を行い、余剰室である元子供室の状況や夫・妻の専用室、住まい方や意向を尋ねた。比較を行い、元子供室の利用状況について記述する。具体的には、EN 初期の 484 世帯と EN 中期の 424 世帯を対象としたアンケート調査(回収率 8%)を行った。
研究 2 年目（2022 年）は、北海道室蘭市、青森県八戸市において、実家を巣立った大学生を対象に実家の図面調査、巣立ちに関するアンケート調査を行った。室蘭では、巣立った子供のライフイベント（子供結婚、孫の誕生、それらに伴う実家への訪問）を想定しもらい、そこでの部屋利用の違いなどについて調査を行い、八戸では学生の実家へ帰りたいという「帰巣意識」を調査した。対象数は北海道室蘭市が 110 件、青森県八戸市 91 件、となっている。また、EN 中期や EN 後期の元子供室の利用状況について、室蘭において大学生の親（学生からみると祖父祖母）の家について、子供や孫（学生）のライフイベントと関連した利用実態について調査を行った（54 件のアンケート調査）。
最終年（2023 年）の調査は 2 点行なうが、主に EN 中期や EN 後期の元子供室の利用状況について調査を行なうことにした。北海道北見市の訪問調査では、建設年数 1993～97 年の戸建て住宅 20 戸を対象に詳細な訪問調査を行った。また「子育て期終了後の住まい方」について築年数 20-30 年経過を目安に、千葉県佐倉市（配布 836 件、回収 133 件、回収率 16%）千葉県東金市（配布 677 件、回収 65 件、回収率 10%）でアンケート調査を行った

４．研究成果

研究 1 年目（2021 年）の結果としては、元子供室の利用において、EN 初期に比べ EN 中期では子供の帰省頻度が減り帰省時の元子供室の利用も減少していた。また、子供の私物の残存量（ここでは私物残量 60%についてみると）も EN 初期から EN 中期で 50%から 21%と半減している。元子供室の利用については EN 初期から EN 中期にかけ夫婦それぞれの専用室利用が 9%から 24%と増加が把握された。また、夫・妻自身のライフイベントは夫・妻の領域変容にあまり影響しないが、子供のライフイベントが進むことで夫・妻が領域を拡大する動きがみられた。例えば、子供の結婚の有無では、夫・妻の専用利用が 38%（有）と 4%（無）と大きく変化する。これは、

子供のライフイベントが起きていく過程で夫・妻が元子供室を巣立った子供のために残さなくてよいというある程度の気持ちの整理がつき、夫・妻は自身の領域の獲得に乗り出すと考えられる。

研究 2 年目（2022 年）では、特に EN 後の接客行為について着目した。まずは北海道の調査から、そもそも「客を招かない」世帯は LD 床面積が 11.5 畳未満では 50%、13.5 畳以上では 17%と大きく異なること、また子供家族の宿泊を想定した際の宿泊頻度では現在の空室数が影響すること、また、世帯主における子供世帯の許容日数では「宿泊部屋の普段利用」「隣接室数」「LD の床面積」の 3 点の条件が影響し、住宅にゆとりがある場合は許容日数が増加することが把握された。

また、青森の調査からは、実家への居住希望は 3 割程度であること、また子供室の隣接関係と非帰巣意識/帰巣意識の関連から、実家学生では子供室のプライバシー性の高さに対する住要求が窺える点、非実家学生の子供室は自分以外で使う人はいない場合が 5 割を占め、子供の私物は大半が残っており、子供自身はできるだけ長く実家に残しておきたいと考えていることなどが把握された。

室蘭で行った EN 中期や EN 後期の元子供室の利用状況については、祖父母は普段リビングでの食事が 39%と大きく、恐らくユカ座での食事がそもそも多いこと、子供と孫の来家時では 7 割近く、リビングで食事を行っていること、また、子供らの宿泊部屋の床のしつらいはフローリングより畳の方で宿泊率が高い（例えば、孫が小学校入学時では 35%も差がある）ことが明らかになった。

研究 3 年目（2023 年）では、北見調査では巣立った住宅で、子供が宿泊しない割合は 36 人の子供中 7 で、これらは市内に住宅を持っていることが明らかとなった。興味深い結果としては、何も使用されない元子供室は 3/31 件とかなり少ないこと、また元子供部屋への子供の宿泊の有無に関わらず、父母の利用の多さはほとんど変わらない。

また千葉調査では、回答数 198 件のうち、子供が全員巣立っている住宅は 115／190 件存在していた。ここでは 10 年前からの変化を分析しているが、北海道調査（2021-2023）と比べ、「就寝状況の変化がない」が 105／198 件、「元子供室をよく利用している」が 141／198 件で異なる。また佐倉市（6 件）東金市（3 件）については個別でヒアリング調査を行った。居住者の多くは、7，80 代だったが、子どもの巣立ち後の時間が長いと子供私物の処分が行われること、また、インドア的な趣味ができると元子供室も積極的に利用する一面も捉えている。

EN 初期・EN 中期では、夫婦による元子供室の積極的な利用はあまり見られなかったが、EN 後期では元子供室の積極的利用が見られた。つまり巣立ち前の子供を中心とした住宅から、夫婦中心の住宅利用になるまで、かなりの時間が見られるが、それでも元子供室の積極的な利用が広範に見られたことは、住み替えの少ない日本の持ち家において空間利用の大きな変更を意味すると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 真境名 達哉、西本 涼将、山崎 迅、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 エンプティネスト期の子供家族の来客による住宅の変容に関する研究 その1 エンプティネスト期の住宅における間取りの特徴
３．学会等名 日本建築学会大会梗概集
４．発表年 2023年

１．発表者名 西本 涼将、真境名 達哉、山崎 迅、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 エンプティネスト期の子供家族の来客による住宅の変容に関する研究 その2 普段の接客と子供家族の宿泊を想定した際の住まい方
３．学会等名 日本建築学会大会梗概集
４．発表年 2023年

１．発表者名 山崎 迅、真境名 達哉、西本 涼将、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 エンプティネスト期の子供家族の来客による住宅の変容に関する研究　その3 食事と宿泊室に着目して
３．学会等名 日本建築学会大会梗概集
４．発表年 2023年

１．発表者名 西尾 洸毅、真境名 達哉、山岸 輝樹
２．発表標題 実家における子供室の隣接関係と巣立意識・帰巣意識の関係についての一考察
３．学会等名 日本建築学会大会梗概集
４．発表年 2023年

１．発表者名 西本 涼将、 田村 幹、真境名 達哉、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 ライフイベント時の領域変容からみたエンプティネスト住宅に関する研究 その１ 余剰室の利用実態を元子供室の状況からみる
３．学会等名 日本建築学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田村 幹、西本 涼将、真境名 達哉、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 ライフイベント時の領域変容からみたエンプティネスト住宅に関する研究 その２ ライフイベント時の領域変容
３．学会等名 日本建築学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 齊藤光，畔蒜佑一，山岸輝樹
２．発表標題 千葉県内の戸建て住宅における子育て期終了後の生活変化とエンプティネストに関する研究 その1 生活変化と空間利用の変化の特徴
３．学会等名 日本建築学会全国大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 畔蒜佑一,齊藤光，山岸輝樹
２．発表標題 千葉県内の戸建て住宅における子育て期終了後の生活変化とエンプティネストに関する研究　その2 生活変化 空間利用 変化 実態
３．学会等名 日本建築学会全国大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 山崎 迅、真境名 達哉、西本 涼将、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 ライフイベント時の領域変容からみたエンプティネスト住宅に関する研究 その3 子供室を中心とした父母と子供の領域変容
３．学会等名 日本建築学会全国大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 山崎 迅、真境名 達哉、西本 涼将、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 エンプティネスト期における子供室を中心とした父母と子供の領域変容
３．学会等名 日本建築学会北海道支部研究発表会
４．発表年 2024年

１．発表者名 山崎 迅、真境名 達哉、西本 涼将、山岸 輝樹、西尾 洸毅
２．発表標題 エンプティネスト期における子供家族の来客実態　-食事と宿泊室に着目して-
３．学会等名 日本建築学会北海道支部研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小林 大地，西本 涼将，真境名 達哉，山岸 輝樹，西尾 洸毅
２．発表標題 北海道平成期における戸建住宅の間取り変遷の把握
３．学会等名 日本建築学会北海道支部研究発表会
４．発表年 2022年

１．発表者名 西本 涼将，小林 大地，真境名 達哉，山岸 輝樹，西尾 洸毅
２．発表標題 北海道平成期における戸建住宅の間取り変遷の把握
３．学会等名 日本建築学会北海道支部研究発表会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	西尾　洸毅 (NISHIO Hiroki) (30845764)	八戸工業大学・工学部・講師 (31103)	
研究分担者	山岸　輝樹 (YAMAGiSHI Teruki) (50736155)	日本大学・生産工学部・准教授 (32665)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関